キセル

佐井 識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キセル

【Ｎコード】
Ｎ００３５Ｑ

【作者名】
佐井　識

【あらすじ】
私はきょとんとすることができない。いつも3秒早く気づいてしまう――
複雑な家庭環境で育ったため、醒めた目を持つ紫野。“研修中の新入社員”という中途半端な立場を持て余す彼女は、同期のなかにうまく居場所をみつけることができない。義理の兄・隆之介との関係も保留気味。そんなある日、かつて暮らしていた町へ研修で赴くことになり、貧しかった過去の自分と、恵まれている現在の自分とのギャップを目の当たりにして心揺れる。

『さよならお兄ちゃん』の後日談です。ストーリー的には独立した話となっていますが、前作を読まれたほうが人間関係などわかりやすいかと思います。

第1話

女の子はみんな、きょとんとするのが上手だ。目をぱっちり見開いたり、小首を傾げたり、愛らしく口を開いたりする姿は、とても無防備で可愛らしい。

だけど私は、いつも3秒早く気づいてしまう。誰かが何かを言い終わる前に。皆が反応する前に。ひとりだけ別の時間軸を生きているかのように。

私はきょとんとすることができない。

「三崎さんってさ、テレビとか見たりするの？」

配られたレジュメをファイルに片付けていたら、うしろの席に座っていた同じ寮の女の子たちに、いきなりそんなことを言われた。座学続きの研修の1日が終わった。午後の題目は、原子力発電の歴史と現状について。火力発電の授業より長い時間を割いているということは、会社としては新入社員のうちにプライオリティを刷り込んでおきたいのだろう。

「見るよ、普通に。なんで？」

ゆっくり言葉を選びながら、微笑みとともに答える。質問には端的に回答し、「普通に」で武装を解き、疑問形で終わることで会話する意志を表したつもりだった。

きゃー、ほらさ、と彼女たちは楽しそうに互いを向き合った。

「三崎さん、フランス映画とか見てそうな雰囲気あるなって、みんなで話してたの」

「『日本のドラマなんてくだらない』みたいなセリフが似合いそうだなって。あ、褒めてるよ！」

いったい何を褒めているつもりなのかわからなかったが、一緒になって笑う。

「ドラマも見るよ。最近は疲れちゃって、テレビをつけずに寝ちゃうことが多いけど。来週提出の課題、みんなもう終わらせた？　私、ついつい先延ばしにしてて」
課題という単語に、女の子たちはひときわ高い声で反応した。
「やってなーい！　よかった、三崎さんもまだで。結構めんどい設問多いよね」
「このあとみんなで、カフェで一緒に課題やろうって話してたんだ。よかったら、三崎さんも来ない？」
まばたきをするあいだに、頭の中で数える。先週似たような誘いを受けたときは断わっていた。連続で断わるのは避けるべきだった。それに金曜には新入社員の飲み会がある。その前に女の子たちのサークル内で波風立てるのは、得策ではないだろう。
「ありがとう。行くね」
「えー、女子たちだけ？　俺も行きたい」
振り返ると、村林悠太が立っていた。
「ヤッシーも来る？　いいよ」
女の子たちが声を弾ませた。「村林だから、大学ではヤッシーって呼ばれています」と内定式で自己紹介して以来、彼はそのあだ名で呼ばれていた。続けて言った「でも、田中康夫ほどエロくありません！」という発言は、同期はともかく、中年の上司には大いにウケていた。
「じゃあ、日誌書き終わったら下に集合しよ」
「わかった。俺のほうでも、適当に男に声かけとくね」
話はトントン拍子にまとまっていた。私は笑みを浮かべて黙ったまま、それが過ぎるのを待っていた。
「あとでね、三崎さん」
村林がチラリと私を見て、男の子たちの集団に混ざって行った。多目的ルームからぞろぞろと男女が移動していくさまは、大学時代を思わせる。違いと言えば、みんな地味なスーツを着ていることくらいだ。新入社員研修。もう学生ではないけど、配属までしばらく

こんな日々が続く。宙ぶらりんな身分の私たち。
廊下の窓の外では、強い西日が5月の新緑を照らしていた。桜の木はその枝先に、鮮やかな緑色を繁らせていた。

残念ながらというか案の定というか、課題もそこそこに、勉強会はおしゃべりタイムへと突入した。
「でさ、その事業所に配属になった先輩、歓迎会でブリーフ一丁で踊る羽目になったんだって」
村林の一言に、ドッと場が盛り上がる。女の子たちが口を押さえて「やだあ」と笑った。
同期はとにかく人数が多い。関東一帯に電力を供給する会社だから当然かもしれないけど、高卒と大卒、さらに高専や短大からの採用もあるので、総合すると私が通っていた大学の学部の人数を余裕で超えていた。今は大卒・総合職採用のみの研修を受けているが、それでも１００人近い人数がいる。入社して1か月半経つとはいえ、配属先の噂、先輩の噂、同期の噂……話のネタは尽きることがない。
「さすが、ヤッシーの先輩って感じ。早稲田のイメージ通りだね」
「俺はブリーフじゃなくボクサーパンツ派だけどね」
大袈裟に肩をすくめつつ、村林は「ぶっちゃけ宴会芸には自信あるけどね」と笑う。
「今なら絶対、ＡＫＢ４８を完コピする。スカートはいて、『会いたかった～会いたかった～イェス！！』」
村林が右手を振り上げ、裏声で決めポーズした。男の子も女の子も噴き出した。私は口の端を上げながら、ぼんやりとテーブルの上に並ぶ飲み物を見ていた。アイスカフェラテ、アイスキャラメルラテ、アイスコーヒー、アイスカフェラテ、アイス抹茶ラテ、アイスメープルミルクティー、アイスカフェモカ。
私の手元にあるのはアイスカフェラテ。氷が溶けて薄まってしまっていた。ホットにすればよかったかもしれない、と思った。
「配属発表、マジで不安」

向かいに座っていた女の子が長い髪を耳にかけながら言った。小ぶりのピアスがきらりと光った。
「どこに配属になるかで、人生変わるよね。生まれたときからずっと杉並の住人なのに、いきなり茨城の山奥とかになったらどうしよう」
「杏奈は可愛いから絶対本社だって！　広報部行けると思うな」
私を誘った女の子たちが頷く。本人は否定しつつも、満更でなさそうな表情を浮かべた。私はそっとグラスに口をつけた。広報部に行きたいという女の子は多い。もしくは秘書部。確かに彼女は美人だから、希望の部署に行けるのかもしれない。嫌味でなく、それは素晴らしいことだなと思った。美しかろうと賢かろうと、追い立てられて目の前の仕事をするしかない人間もいるのだから。
たとえば、私の姉のように。
グラスについた水滴が、一瞬汗に見えた。記憶の中の姉はいつも、額に汗を浮かべて笑っていた。冬でもそうだ。何故なら、ひたすら働き続けていたから。朝6時に起きて工場に出かけ、夕方アパートにいったん戻り、自転車で場末のクラブへと出勤し、夜中に帰ってきた。それらはすべて、幼い私を食べさせるためだ。今思い出しても、気が遠くなるような作業だった。
「そういえば、三崎さんは何志望なの？」
突然話を振られて、現実に引き戻される。うーん、と考えるふりをしながら、私は記憶を頭の隅に追いやった。
「どこでも。なんでもいいよ」
それは正直な意見だったのだけど、彼らを驚かせてしまったらしい。
「えー、すっごい田舎に配属されたら嫌じゃない？」
「あたし、営業でも怖いもん。いきなり外回りとか、ほんと無理だし」
私は笑いながら少しうつむいて、指先でストローを素早く動かした。カラカラカラと、氷がグラスに当たる音がする。

「仕事って、自分で選ぶものだと思ったことないから」
インフラ系をメインで受けていたのは事実だけど、別にこの会社に思い入れがあったわけじゃない。たまたまはやめに受かったのがここだったというだけだ。なるべく潰れなさそうで、安定していて、女でもずっと働けて、寮に入れる会社ならどこでもよかった。誰の手も借りずに生きていくことさえできたら。
仕事に出かけていく姉の後ろ姿が脳裏をよぎった。
姉がいなくなって、もう7年以上が経つ。
「なんか……。三崎さんって、大人っぽいよね」
誰かが感心するように言った。周りの子たちも頷いた。全員が私を見た。
みんなよく似ていた。
新しいスーツを身にまとい、カフェに集まって、おしゃべりする新入社員たち。出身地も、境遇も、大学のランクも似たような人間が、選り分けられ、同じような格好で、一堂に会している。工場の事務員と場末のホステスという職業を彼らは一生知ることはないだろう。
その中に私がいることが、とても奇妙なことのように思えた。

第2話

１９時を回ったところで、会はお開きとなった。気を効かせた女の子たちが、全員のグラスを集めて返却カウンターに持って行った。私はその気遣いに甘えることにして、荷物を持って先に店を出た。

「君、“紫野ちゃん”？」

突然下の名前を呼ばれて驚いて振り返ると、黄色いネクタイを締めた、短髪のサラリーマンが立っていた。見覚えのある顔だった。

「あ、やっぱり。いきなりごめん。変質者じゃないよ？」

彼は自分で言ったことに対して、ハハハと笑った。

「憶えています。兄が……いつもお世話になっています」

小さく会釈した。兄が会社で仲良くしているらしい先輩だった。3月に子どもが生まれたばかりで、赤ちゃんと一緒に映っている写真を私は見たことがある。

「大人っぽくなったね～！　スーツ似合ってるよ。ほら、高校生のときのイメージが強いからさ」

村林が興味津々といった顔で様子をうかがっているのが目の端に映る。それに気を配りながら、私は微妙に身体の角度を変えた。

「君の兄貴が淋しがってるよ。『紫野ちゃんが家を出てから、まだ一回も会えてない』って」

私は苦笑した。そんなことまで話しているのか。

「まだ2か月しか経っていないですし、メールや電話はたまにしていますよ」

冗談っぽく言ったつもりだったけど、我ながらどこか言い訳じみていたかもしれない。だが彼は特に気にかけることもなく快活に笑った。

「まあ、元気そうでなによりだ。香田に伝えておくよ。引きとめて悪かったね」

彼は遠巻きにこちらを見ている同期たちを見やった。それから「

そうだ、一応ね」と言ってポケットから名刺入れを取り出した。研修で最初に習った名刺のやり取りを思い出し、両手を出して受け取る。

「ごめんなさい、私はまだ名刺がなくて」

名刺の右肩には「香田製薬」のロゴがプリントされている。医療用医薬品から風邪薬、健康飲料まで展開する製薬会社で、いわゆる大企業だ。同じ名字の兄の父が専務取締役で、兄の伯父が社長をしている。だけど私は他人事のようにロゴを眺めた。実際、彼らとはほとんど関係がない。私が繋がっているのは兄ただひとりだった。この関係を他人に説明するのはとても困難なので、自分から明かすことはない。

「じゃあ、配属決まったら祝いがてら飲もう。もちろん香田も一緒に」

そう言って笑うと、彼は歩き始めた。私は後ろから声をかけた。

「お子さん……、ご出産おめでとうございます」

びっくりしたように振り返ったあと、彼は照れた顔をした。

「今の人、誰？　知り合い？」

待っていた同期のもとへ戻ると、さっそく村林が聞いてきた。

「兄の会社の先輩」

「お兄さんいたんだ」

村林が意外そうな顔をした。私は同期の前で家族の話をしたことはなかった。

「なんて会社？」

香田製薬と答えると、サークルの先輩でひとりいるよ、ＭＲだからめっちゃ忙しそうだけど給料はかなりいいみたいで、と聞いていることをつらつら喋り始めた。私は返事することなく、黙ったまま駅への道を歩いた。

「お兄さんとはいくつ離れてるの？」

「……７つ」

「結構年の差あるね！　他に兄弟いるの？」
私はしばし思案してから、口を開いた。
「姉がひとりいる」
「じゃあ三人きょうだいだ。俺も三人きょうだいの真ん中でさ」
駅に着いていた。村林の能天気な声を遮るように、Ｓｕｉｃａで改札に触れて電子音を立てた。男子と女子の寮は別の場所にあるので、乗る電車は違う。
「違うよ、三人じゃない」
行きかう人たちの流れをくぐりながら言った。
「うちはふたりきょうだいなの」
村林がぽかんとした。彼が何か言う前に、私はやってきた電車に乗った。

混んでいるのを理由に、女の子たちの固まりから距離を取り、ひとり扉付近に立つ。彼女たちと遮断されたのを確認すると、スーツの背中が重なる隙間に自然とため息が漏れた。
村林への返答。誤魔化してもよかったけど、なるべく嘘をつかないというのが自分の中のルールだった。嘘をつき通すのは体力を使う。それでも絶対に、と思える嘘しか私はつきたくなかった。本当に自分に必要な嘘、と言い換えられるかもしれない。でも、それだって綺麗事で、嘘なんて実際のところは自己中心的な保守や思い込みにすぎないことも知っている。
１５歳のときから7年間、私はひとつの嘘をつきとおしてきた。おかげで私の身体の内側には、いびつな空洞が作られている。真実を閉じ込める代わりに嘘に食い潰された穴だ。嘘はこの春終わりを迎えたけど、だからといって空洞が埋まるわけじゃなかった。もしふさがるとすれば――そんなことがあれば、の話だけど――少なくとも7年以上かかるだろう。成長とともに広がった、光の差さない暗い穴。
電車が揺れて、私の身体も揺れた。意識を取られた隙に、穴の中

の反響が大きくなる。私は舌打ちしたくなった。この空洞の中では、いつも誰かの言葉が果てしなくこだまし続けているのだ。今、この瞬間にも。

「「わが社は日本における原子力発電のパイオニアとして……」」

「「どこに配属になるかで人生変わるよね」」

「「三崎さんって、大人っぽいよね」」

電車の扉に背中でもたれかかりながら、私は目を閉じた。

ああ、どうでもいいことばかりだ。

私には姉と兄がいる。

血が繋がっているのは姉で、でも彼女はもういない。何もかも置いて、7年前にいなくなった。はやくに両親を失ってから、たったひとりで私を育ててくれた姉。玉の輿が決まったのに、別の男の子どもを身ごもって突然出奔した。いまだに消息はつかめていない。だから私の記憶の中の彼女はいつまでも23歳のままだ。その輪郭もだんだんと薄れていくような気がしていた。

姉とバトンタッチするように、私の人生にやって来たのが兄だ。姉の婚約者だった人だ。私は姉がいなくなった理由を知っていたけど、何も知らないふりをしていた。ひとりでは生きていけなかったし、いつか姉は帰ってくるんじゃないかという期待を捨てられずにいたからだ。兄は血縁関係も姻戚関係も何もない私を引き取った。それから7年同じ家で一緒に暮らした。

本当ならこの春、すべての関係を終わらせるつもりだった。嘘がタイムリミットを迎えたからだ。何も知らない子どものふりをして、いつまでも庇護下にいることはもう限界だった。兄には自由になる権利があった。みなしごはみなしごに戻るべきだと思ったのだ。

だけど兄は私を離さなかった。嘘を告白した私を、信じがたいことに彼は許した。そんなわけで何故かまだ、私たちは兄妹を続けている。

ただし言われたとおり、3月の末に家を出てからは戻っていない。

週末に実家に戻る同期は多いけど、私は寮にとどまっていた。
帰れない理由があるわけじゃない。だけど同期たちのように、親や地元の友だちに会いに帰るのとはやっぱり違う。6月になって配属先がちゃんと決まったら、報告がてら帰ろう。勝手にそう決めていた。
さっき久しぶりに「紫野ちゃん」と呼ばれて、変な気持ちがした。入社以来、私はずっと名字で呼ばれている。私をその名で呼ぶのは兄しかいない。天然で、ドジで、お坊ちゃん。そして私が知る限り、世界で一番のお人好しだった。
懐かしい匂いがした。2か月会ってないだけで、人はもう懐かしいなんて思うらしい。何故だかそれを悲しいと思った。不思議な感覚に、私はしばらくのあいだ身をゆだねた。

第3話

その金曜日、点呼を取られたときから嫌な予感はしていた。私のこの手の予感はたいてい当たる。昼休憩前に実地研修のグループ分けが発表されて、やはり予感は的中した。しかも、2つも。

「三崎さん、よろしく！」

皆がざわざわと移動を始めるなか、グループ分けが記されたレジュメを手に、村林がテンション高く近づいてきた。仕方なく、小さく会釈して応える。

午後からは営業研修の一環として、2人一組で電気料金を滞納している家庭に集金に行く。新入社員のあいだで「取り立て屋」と呼ばれ、もっとも恐れられている研修だった。

「三崎さんと一緒だったら、いい打率出せそうな気がするな～。結構、容赦なく取り立てるタイプじゃない？　あ、でも回収率高すぎるとアレかな」

この研修のテーマは末端の現場の感覚を知ることであって、くまなく集金してくることは元々求められていない。実際、1～2軒からしか集金できないこともよくあるのだという。逆にあまりにもうまくいきすぎた者は、営業所への配属が内定するのだという噂がまことしやかに流れていた。

「村林君なら心配ないんじゃない？　人見知りしなさそうだし」

褒めたつもりではなかったが、村林は謙遜するように手を顔の前で振ってみせた。

「こう見えて俺、意外とシャイなとこあるからさ。三崎さんみたいに淡々としてるほうがホンモノの取り立て屋っぽいじゃん！　『レオン』みたいにさー」

本物の取り立て屋など私は見たことなかったし、村林も同じだろうが、確かにおしゃべりな男には向いてない職業だろうと思った。だが、これから行うのは債務の回収などではなく、ただの新人研修

だ。ついでに『レオン』は殺し屋の話であって、取り立て屋ではないはずだが、突っ込まないでおいた。
「行きましょう」
鞄を肩に引っかけ、歩き始めた。１３時までに最寄りの営業所に行かなければならない。
「しっかし北東エリアが当たるとは……。結構、ガチで払えない系が多いんじゃね？　俺も三崎さんも、運ないね」
村林が言った。それは同感だった。村林と組む羽目になったのも大概不運だったが、行き先を思うと気持ちが翳った。
千葉県にほど近い、東京２３区北東部。よく言えば下町、悪く言えば粗雑な町々。２３区といっても広い。渋谷や新宿といった繁華街からはだいぶ離れているし、いわゆる東京のイメージとは違う、土と川の匂いのする土地。東京に住んでいたって用事がなければ気に留めることもないし、よそ者を受け付けない独特の空気を持つエリアだった。
私はかつて、そこで姉と暮らしていた。

「４軒目終了、っとぉー」
村林が手元の一覧表に赤ペンでチェックをつけた。私は腕時計を見た。１５時半を回ったところだった。
最寄りの営業所で集金の方法と注意事項を教わり、地図のコピーと行き先の一覧表を手渡された。営業所の人から「無理はしないように」とアドバイスを受けていたが、１軒目は不在、２軒目は子どもしかいなかった。３軒目は明らかな居留守だった。これでは無理のしようもない。
ようやく、この４軒目で最初の集金に成功した。アパートに住む独居老人らしきお爺さんは、何度も謝りながら、玄関脇の引き出しに手をかけた。茶封筒を取り出すと、そこから直接現金を抜き出し、私たちに渡した。ついでに甘露飴もくれたので、有り難く受け取った。

駅までの道を戻る。5月末の日差しは強く、梅雨に入る前に太陽が照らせるだけ照らしてしまおうとしているようだった。おかげで歩くだけで汗が流れ、白いシャツが肌に張り付く嫌な感覚がした。

「電車に乗る前に、ちょっと休憩しない？」

疲れていたのか珍しく黙っていた村林が、我慢できないというふうに言った。私もいい加減喉が渇いていたので、頷いた。

「このへんにタリーズないかな」

ないことがわかっていて、村林は冗談めかして言った。彼もまた、額に汗がたまっている。

「あそこに喫茶店があるけど」

私が指差した先には、クラシックな――というより古めかしい喫茶店が鎮座していた。ガラスの色が薄く茶がかっていて、「自家焙煎」と大きく書いてある。都心ではあまり見かけない雰囲気の店だが、ここの街並みには馴染んでいた。

「うーん、正直、今まで入ったことないタイプの店なんだけど」

村林がバツの悪そうな顔をした。

「でも三崎さんが好きなら……」

「そういうんじゃないよ、言ってみただけ。気にしないで」

見知らぬ土地でいちいち店を選びたがる村林に一瞬腹が立ったが、見知らぬ土地だからこそ、村林は拒否反応を示したに違いなかった。私はつとめて軽い口調で提案を取り下げた。彼にそのつもりはなかっただろうけど、私がこの手の喫茶店に行き慣れているような言い方をされたのも少し癪に障った。だからこそ余計に、この話ははやく終わらせてしまいたかった。

結局、駅前のマクドナルドで落ち着いた。村林は上着を脱ぐと、キャスターマイルドをわざとらしいくらい美味しそうに吸った。

「すっげ疲れたあ。全然集金できないのに、歩き回るから体力ばっかり使うし。ああ、はやくビール飲みてー」

今日の夜は新入社員の飲み会が予定されていた。来週いよいよ配属先が決まり、皆バラバラとなる。その前の最後の金曜日というこ

とで、慰労会も兼ねた大規模な飲み会だった。
「さっきのお爺さんさ」
村林は携帯電話をいじりながら、口元をほころばせた。
「あんなところに金置いてたら、玄関から丸見えだよね」
こらえきれないというように、くっくっく、と笑みがこぼれる。
「甘露飴とか、ベタすぎでしょ。俺、笑いこらえるのに必死だったよ」
同じことを私も感じていた。だが、私は笑えなかった。
小刻みに震えていた、皺だらけの指先。テレビの大きすぎる音が響いていたアパートの部屋。あの老人はもっと私たちと喋りたそうにしていたが、上手いこと言ってさっさと引きあげた。滞在時間は5分にも満たなかったと思う。なすべき仕事をしただけなのに、思い返すと、何とも言えない暗澹たる気持ちになった。私は黙って氷抜きのアイスコーヒーをストローで吸った。
「そういえば三崎さんってタバコ吸わないんだよね。結構意外」
2本目に火をつけながら、村林が訊いた。
「また取り立て屋のイメージとか言うんでしょ」
「だって、似合いそうじゃん。女子たちが騒いでる横で、黙って一服してそうな雰囲気があるよ」
私は苦笑した。愛想良くしているつもりだったけど、まだ足りないのかもしれない。
「タバコなんて吸ったことすらないわ。一生吸わないと思う」
「げっ、もしかして嫌煙家？　副流煙とかにも気使ってる系？」
村林は大袈裟に反応したが、そういうわけではなかった。むしろ、誰がいつタバコを吸っていようが、私にはどうでもいいことだった。
「住まわせてもらってるところに、匂いをつけたくなくて」
15歳から私の家になった、白い一軒家が目に浮かんだ。はじめて足を踏み入れたとき、オーダーメイドの家具や真新しいカーテンを見て、モデルルームのように感じたことを思い出す。木造のアパートに住んでいた少女にとって、ドラマの中みたいな世界だった。

だがそれは新婚の兄と姉のために用意された家で、私はオマケで住まわせてもらえるのだということもわかっていた。いつ追い出されるかも知れないこの家を、なるべく綺麗に使おうと誓った。

「俺も、ベランダで吸え！って母親にしょっちゅう怒られるよ。冬なんか寒くてさあ。親父と男ふたりで、わざわざダウン着て吸ってたりする」

我ながら情けない姿なんだこれが、と村林は笑った。その情景を想像すると素直に微笑ましくて、私は今までで一番、この男に好感を抱いた。同時に、やはり違う種類の人間なのだとも感じた。家庭の話をこれほど屈託なくすることができる。姉の話も兄の話もしない私とは、まったくかけ離れていた。

第４話

５月の日暮れは遅い。私たちが最後の１軒へと向かう電車に乗った頃、西日はおっくうそうに、ようやく角度を変え始めていた。

最後の目的地は、あろうことか、私と姉が暮らしていたまさにその町だった。一覧表をなぞる村林に町の名を聞かされたとき、思わず叫びだしそうになるのをこらえた。いや、もしかしたら、そんな予感はしていたのだ。今日は嫌な予感がよく当たるから。それでも、吊革を握る力が自然と強くなる。

まだ帰宅ラッシュには少し早い時間帯。優先席付近にたむろしている高校生の集団が少しうるさいぐらいで、夕方特有の退屈な空気が車内を支配する。村林が欠伸を噛み殺した。

「ようやくラストかあ。しかしマイナーな駅だよね。俺、こんな駅があること自体はじめて知ったよ。三崎さん行ったことある？」

無邪気な声は、まさか私が昔住んでいたなんて想像もしていないだろう。私は窓の外を見た。

「……ずっと前に。でも、もう何年も行ってない」

正確な言い方ではないかもしれないけど、少なくとも嘘ではなかった。兄に引き取られてから、私は一度も訪れたことはなかった。

「へえ！　どんなとこ？」

窓の外の景色は、目的駅に近づくにつれ、背の低い建物が多くなる。ときどき工場の煙突が現れた。あの中のどれかに、姉の元勤務先があったかもしれない。

「何もないところ。住んでいる人以外には、縁のない町よ」

おとしめたわけではなくて、住む町というのはそういうものだと思う。学校や仕事でよその大きな駅を使うことはあっても、必ず戻ってくる場所こそが住む町だ。兄と姉の結婚話が出るまで、私も町を出るなんて考えたことはなかった。定時制高校に行きながら、適当な働き口をみつけ、姉と助け合って生きていけたらと。さすがに

私ほど差し迫った家庭環境の同級生はいなかったけど、でも多かれ少なかれ、皆、地元を基盤に生きていくのが普通だった。同じ区内でもよく知らない町があるのに、川をふたつも越えて都心の高級住宅街に引っ越すなど、あまりに現実感のない話だった。当時の私は喜ぶどころか、兄に対していつも懐疑的な視線を送っていた気がする。

１５歳。私は確かに、あの町の住人だったはずなのに。

分厚い太陽が時間をかけて西の空を侵食するように、身体の内にある空洞が、耳障りな重低音に侵されていく。

まぎれている言葉を聞きたくなくて、私は意識的にスイッチを切った。

ひとつしかない改札を出て、町に降り立った。

その瞬間、覚悟していたにもかかわらず、それはあっけなくやぶれた。私は目を見開き、続いて眩暈がした。身体の芯が勝手に震えた。

町は何ひとつ変わっていなかった。買い物スポットとしてはほとんど機能していなかった駅前商店街は、やはりシャッターまじりで閑散としている。左手にはきもの屋。奥に薬局。向かいに中華料理屋。全部憶えていた。新しくできたらしいチェーンの居酒屋もあったが、夕日に照らされた「生ビール平日２９０円」ののぼりは、むしろ通りのひなびた印象を強めるだけだ。

誰かが善意で世話をしていた、駅の出口に置かれたプランターのヒビすら記憶通りだった。私は全部憶えていたし、その間、町も変わらずにあった。私がずっと、ただ知らないふりをしていただけだった。はっきりとわかった。

「えーっと、とりあえず商店街をまっすぐかな？」

地図に夢中になっている村林は、私がどんな表情をしているかなんてちっとも気づいていない。ありがたかった。息を吸い込み、吐いて、改めて町を見据えた。

試されている――。そう思いかけて、自嘲した。自意識過剰にもほどがある。そんなふうに捉えるべきではない。何事も。
「はやいとこ行って帰りましょう」
村林に言ったというより、むしろ自分に言い聞かせたのかもしれない。閑散とした商店街を、ずんずんと歩き始めた。
昔の知り合いに遭遇する可能性が充分にあったから、私はなるべく余計なものを見ないようにして歩いた。一瞬でも立ち止まりたくなかった。
クリーニング屋の角を曲がるときは、思わず頭を垂れた。中学の同級生の実家だった。心臓がドクドクと早鳴るのを必死で抑えながら通りすぎる。見られませんように。見つかりませんように。ストールでもあれば顔を隠せたかもしれないのに、リクルートスーツ姿じゃどうしようもない。だから、はやくこんなものは脱いでしまいたいのだ。
角を曲がる。道路を渡る。先へ先へと急げば急ぐほど、なぜか迷っているような気分になった。
一方、身を縮めて足早に歩く私に反比例して、村林はこれで終わりなのが嬉しいのか、町の景色に無邪気に反応していた。道すがら、いちいち感嘆の声をあげる。
「すげー、この町、コンビニが全然ないね」
「三崎さん、この自販機の商品、全部８０円だって！」
どうでもいいことばかり単純に喜べるのは、この男の特技なのか。さっき、少しでもありがたいなどと思った自分を後悔しながら、振り切るように私は歩き続けた。
「おーい、三崎さん」
無視して歩く。性懲りもなく、再び村林が呼びかけてきた。
「三崎さんってば」
「だから何よ、もう……」
少し立ち止まるのも惜しくて、上半身だけぐいっと９０度回転させた。つもりだった。逆光で、村林の姿がやわらかい金色に包まれ

ていた。一瞬のうちにせり上がった記憶は、鉄の腕となって私の脳髄を殴った。その場から動けなくなった。これと同じ構図を私は見たことがある。いつか姉はここで、結婚することを告げた。中学校で進路面談を受けた帰り、家へと続く道の途中の夕暮れ。

「目的地、こっちだよ？」

突っ立ったままの私を怪訝そうに見ながら、村林は道を指差した。家へと続く道を。

雷に打たれたように、身体のこわばりがほどけた。次の瞬間、私は村林に駆け寄ると、彼が手にしていた一覧表を奪い取るように見た。

「最後の家って」

村林が目をぱちくりさせながら、「ここだよ」と言って、チェックのついてない住所を指差した。

ああ、いったいどうして。

「第２かつらぎ荘　２０１号室……」

もう戻ることなどないと思っていた家。私の家。

一度だけ、停電を経験したことがある。どうしてもお金が工面できなくなって、電気が止められた。母が亡くなってすぐ、小学生のときだ。

冬だった。ただでさえ隙間風の吹く家なのに、電気もヒーターもつかなくなってしまった。私が不安そうにしていたのだろう、姉はホステスの仕事を休んだ。本当は少しでも働いて日銭を稼ぎたかっただろうに、私を優先してくれた。

姉は物置きからロウソクを取り出して、ちゃぶ台の上にあるだけ並べた。ひとつひとつにマッチで火をつけると、暗い部屋がやわらかい灯りで満たされた。それから家中の毛布を出して、重ねて敷いた。私たちはその上に寝転ぶと、身体をくっつけて転がりながら自分たちに巻きつけた。きゃあきゃあとはしゃいで、とても楽しかった。

毛布の中で身を寄せ合いながら、私たちはたくさんおしゃべりをした。主に姉が聞き役で、私のとりとめもない話を聞いてくれた。「好きな人いないの？」と姉につつかれた。「いないよ、男子たち子どもなんだもん」と答えると、「紫野は大人っぽいからね」と、姉はけらけら笑った。

なんだか修学旅行みたい、と姉は笑っていたけど、今思えば彼女は高校1年で学校を辞めていた。本当ならちょうどそのころ、修学旅行の時期だったのかもしれない。でも姉はそんなこと、絶対に私に悟らせなかった。いつも明るく笑って、私に寄り添っていてくれた。電気なんかなくてもちゃんと暖かかった。姉が大好きだった。

私はあれから、どれだけのものを得て、どれだけのものを失ったのだろう？

第5話

お腹が痛いとか急用を思い出したとか、適当な嘘をついて村林だけを行かせることも考えた。だけど結局、心ここにあらずのまま、3分後にはアパートの外に着いていた。木造2階建てで、すでに築40年近いだろうか。住んでいた頃からボロボロだったが、7年ぶりに対面した家は、いっそう小さく、傷んでいるように見えた。思わずため息が出た。

「東京にもあるんだねぇ、こういうアパート」

感心したように村林が言う。確かに今では映画やマンガにしか出てこないような建物だった。人がまだ住んでいること自体が奇跡的ですらあった。

ギシギシときしんだ音を立てながら、外階段を上る。手すりのクリーム色の塗装がほとんど剥げ、表面に錆びがざらついている。手を触れたら張り付いて離れなくなりそうだった。私は肩にかけた鞄を両手で握ってバランスをとった。

201号室は一番奥の部屋だった。

一覧表に記載されていたのはまったく知らない男性の名前だった。私が引っ越して以降、新たに移り住んだ人がいたのだ。兄と姉の結婚が決まったとき、母の形見などわずかな荷物だけ新居に移して、残りは業者に処分してもらった。私の個人的な荷物もほとんどなかったから、引っ越しは楽だった。よく晴れた3月最後の日に、兄に連れられてこのアパートを発ったのだ。昨日のことのように鮮明な気もしたし、うすらぼやけた遠い思い出のようでもあった。

重たい気持ちを引きずりながら、外廊下を歩いた。心はこんなに嫌がっているのに、足は不自然なほど規則的に動いた。辿りついた201号室のドアは無言でそびえていた。ボタン部分の真ん中が色落ちしているブザーを村林が押す。

「あれ？　反応しないな」

村林が再度挑戦しようとしたところに、私は反射的に横から手を伸ばした。
「押し方にコツがあるの」
右半分を長押しするのが、壊れかけのブザーを鳴らすコツだった。押して遊んでいた頃と変わらないビビーと無遠慮な低音が、夕暮れのアパートに響き渡った。
しばらく、何も起こらなかった。急激に安堵の気持ちが広がった。留守というのはもっとも望ましい結末だった。私はほっと息をついた。だが、念のためもう一度だけ鳴らそうとブザーに手を伸ばしたとき、ドアの内側から物音がした。
ダメだと思うより先に、ブザーを押してしまっていた。再び気に障る音が響く。室内から、外をうかがうような気配を感じた。それからためらいがちに、玄関の鍵が開けられる音。
まるで全力疾走したあとのように、鼓動が速くなり、目がちかちかした。直立不動の姿勢で、だけどなんとか立っていた。吐き気すらした。ドアノブが回る。

不意に、このドアの向こう側にいるのは姉ではないかという考えが、私の脳内を支配した。失踪したあと帰って来た姉が、ずっとここに住んでいるのでは？　世帯主となっている男性は、結婚相手かもしれない。もしかしたらあの不倫相手と無事に結婚して、子どもも産んで、姉はここで暮らしていたんじゃないか。子どもはもう小学校にあがっている年頃だろう。その下に別の子どもさえいるかもしれない。私が兄と暮らしているあいだ、新しい家族とともに、まったく違う人生を送ってきたのだ。どこか遠くへ逃げるより、この町なら姉を一番上手に匿ってくれるだろう。それはひどく自然な考えのように思えた。私が戻らなかっただけで、この古びたアパートで、変わらない生活を続けていたら……。
姉に会ってしまったら、私は何を言えばいいんだろう。「ひさしぶり」？　そんな軽い挨拶はふさわしくない。「ごめんなさい」と

謝るべきかもしれない。でも顔を見た瞬間謝るというのも不自然な気もする。それに姉のことだから、私に謝らせようとせず、自分が平謝りするだろう。それともストレートに「会いたかった」と言うのが正しいだろうか。

だがもっとも恐ろしいのは、姉は私に会いたくなかった場合だった。おおいに考えられた。そうしたら、今更何を言うことがあるというだろう。そうだ、私は兄に「自分のなかで姉は死んだ」と宣言したのだ。そんなのは妹じゃない。会う資格なんてない。

ドアが開き、人影が現れた。

そこにいたのは、姉だった。

しかしまばたきをすると、姉はもうおらず、知らない女性が立っていた。髪をひっつめにし、化粧気がなく、真ピンクのTシャツを着ていた。30代中盤くらいか、もっと上にも見えた。姉とは似ても似つかなかった。

「いきなりお邪魔してすみません。僕たちは電力会社の者です。このたび、支払いを滞納されているようでしたので……」

村林の声がぼんやりと聞こえた。私は直立不動のまま、身体の中で目だけが生きているように、部屋の中をぐるぐると見回した。狭い台所の一口コンロには鍋がかかっていた。隅にはスーパーのビニール袋が積み上げられている。年季の入った換気扇。ひと続きになっている居間には、私が使っていたのと似たちゃぶ台が置かれている。窓には、これまた真ピンクのカーテンがかかっていて、ひらひらと揺れていた。

「???（ママ）」

別の人物の存在に気づいたのはそのときだった。居間と奥の部屋を仕切るふすまから、少女が顔をのぞかせていた。

目の前の女性が何か早口で言い返して、ようやく私たちは、ふたりが中国人であることに気づいた。女性がジェスチャーしながら、片言で訴える。

「おカネ、今ないカラ……」
村林がまいったなーと頭を掻きながら、しぶとく食い下がっていた。その間、私は加勢もせず、じっと少女を見ていた。ふすまの奥にランドセルの赤が見える。ということは小学生なのだろう。真っ直ぐな黒髪をひとつに結んで、村林と母親のやり取りを訝しげに見つめている。
少女の表情を、私は知っていた。外の世界から身を守ろうと、警戒し、気を張りめぐらせる顔。信用できるのはごく狭い範囲だけ。よそから来た綺麗な身なりの大人ほど、用心すべきものはない――そう、あれは私だ。
少女と目が合った。鏡越しに自分と目が合ったような錯覚に陥って、私は一瞬うろたえた。思いきって微笑みかけようとする。だが、少女は私を同じ目でじっと見つめたあと、ふっと目をそらした。そして、表情を変えずにふすまをしめた。
「じゃあ、また改めて来ますから、そのときはお支払をお願いしますね！」
村林がぺこぺこしながら後ずさりし、玄関のドアが閉められた。
「ちくしょー、なんで日本人名義のとこに中国人が住んでるんだよ～」
駅へと戻る道すがら、村林は大袈裟に怒ってふざけてみせたけど、私は気の利いた言葉ひとつ返すことすらできず、彼の後ろに着いていくので精一杯だった。町は相変わらず閑散としていて、もはや顔を隠す努力すらしなかった。紙みたいな精神力で、私はなんとか歩いていた。夕暮れが押し迫ってくる。一刻も早く駅に辿りつきたかった。
「あのブザー、なんでコツ知ってたの？」
村林が思い出したように訊く。夕陽が顔に深い影を落とすのを感じた。もう何と思われても構わない気がして、そのままを言った。
「昔、住んでたから」

村林はきょとんとした。そして、2秒後に爆笑した。
「三崎さんの笑いのセンス、ハンパねー！」
ツボに入ったのか、村林は駅の階段を上がりながら笑い続けた。
私は力なく笑顔を浮かべることしかできなかった。冗談だったらよかった。

改札を通るとき、不正乗車を見た。
ちょうど右隣の改札を出ようとしているサラリーマンとすれ違ったとき、サラリーマンの後方から人影が現れたかと思うと、さっと背後にくっついて、一緒に改札を抜けていった。サラリーマンは何も気づいてなさそうだった。
「ちょちょ、今の見た！？」
左隣の改札を同時に通過した村林が興奮しながら言った。言われるまでもなく理解していた。サラリーマンを利用して、不正に改札を通過したのだ。目にもとまらぬ早業だったから、常習犯なのかもしれない。
「すげー、キセルだ。駅の人に言ったほうがいいかな」
私は首を振った。キセルは中間区間の運賃未払いのことであって、今のような状況を指す言葉ではない、という意味を込めたつもりだったけど、村林は「放っておけ」という意味だと受け取ったらしく、
「ま、もう行っちゃったし捕まんないか」とひとりごちた。もっとも、私も申告するつもりなどなかった。
すべてが私の身体をすり抜けていくようだった。茫然としたまま、死人のようにホームまで歩いた。
「営業所で報告書書いたら、解放だ～」
村林が伸びをした。ホームに電車が滑り込む。これでようやく帰れると思った瞬間、顔が歪んだ。
いったいどこに、私の帰る場所があるというんだろう。

第6話

新入社員飲み会の店は、日比谷だった。営業所の最寄り駅は常磐線だが、千代田線が乗り入れているので、日比谷までは一本で着く。私と村林は並んで座席に座った。

「ごめん、ちょっと疲れたから、着くまで寝ててもいい？」

私が頼るような言い方をするのが珍しかったのか、村林は「いいよ、着いたら起こしてあげるよ」とやけに優しい口調で応じた。お言葉に甘えさせてもらう、という顔をしてから私は目を閉じた。

だけど、もちろん、眠れるわけなんてない。

瞼の裏の暗い世界で、私の目は醒めきっていた。神経を集中させて、何も考えないことを努力しようとする。昂った精神を落ち着かせて、平常心を取り戻す必要がある。日比谷に着く頃にはいつもどおりの顔でいたい。今夜の飲み会が終わって、週が明ければ配属先が決まる。ここさえ乗り切れば楽になれる。適当に飲んで、適当に会話して、適当にやり過ごす。

しかし目の奥の暗闇は、あっという間に体内を流れ落ちていく。押しとどめようと伸ばした手の先からするりと喉の奥へこぼれ落ちた。止める間もなく、深い部分の暗い穴と繋がって広がる。穴がまた大きくなったのが、自分でも見える。

言葉が暴れ出した。

村林の声、マクドナルドの店員の声、４軒目のお爺さんの声……。今日一日のあらゆる言葉が、いっせいに騒ぎ始める。聞きたくない。どうでもいいことばかりなのだから。私がひとり生きていくうえで、本質的に何も関係ない。

「「好きな人いないの？」」

遠い昔の、姉の声。鍵をかけて仕舞っていたはずなのに、今日思い出してしまったから、隣でささやかれているみたいにクリアに響いた。姉の笑い声。何故、そんなに楽しそうなんだろう。

「「好きな人いないの？」」
いない。好きな人なんているわけがない。
だってお姉ちゃん、お姉ちゃんはどこかに行ってしまった。
私が一番好きだった人は……。
穴が広がる。声に捕らわれそうになる。私はそれらを無理やり締め出そうとした。平常心、平常心、と呪文のように頭の中で繰り返す。こんなのには慣れているはずだ。強い力でスイッチを切っていく。大丈夫、すぐに元に戻せる。最後の声を消す。一瞬の空白が訪れる。
沈黙とともに甦ったのは、少女の強い目線だった。
思わず、瞼を開いた。
蛍光灯の明るさに目がくらんだ。１８時台の千代田線は、会社帰りの人びとで混雑し始めていた。あっという間に新御茶ノ水を過ぎていた。隣の村林は、あろうことか小さくいびきをかきながら眠っていた。
私は膝の上で、手を広げてみる。指先ではヌーディピンクのネイルが控えめに光っている。黙って握り締めた。
少女と自分は同じだと、思った。でも思い上がっていた。はっきりと拒絶された。あの町のことなら、なんでもわかっていると思った。だけど実際は7年のうちに、私はすっかり失っていた。私はいつの間にか私が警戒していた種の大人になっていた。少女の瞳はそう語っていた。外部から来た、小綺麗で、信用のおけない大人に。
変わっていなかった町。変わったのは私のほうだった。
捨てられたのだ、と思っていた。私は姉に捨てられたのだと。
――でも、本当に？
≪次は、日比谷、日比谷です≫
電車がゆるやかに速度を落とし、かぶさるようにアナウンスが響いた。身体をぶるりと震わせて、村林が起きた。もそもそと、億劫そうに動く。

≪乗り換えのご案内です。日比谷線、有楽町線、都営三田線は、お乗り換えください≫

私の人生は、いったいいつから変わってしまったんだろう。うらびれた町で育ち、そこで生きていくはずだった少女は。

いつの間にか、違う人生に乗り替えていた。でも私は運賃を払っていない。対価を払っていない。私は何もしていない。見合うものなんて持っていなかった。ただ姉に与えられ、次は兄に与えられ、気づかぬうちに享受して、何食わぬ顔で別の世界に生きている。キセルしていたのは私だ。

「「たまには遊びに帰ってきてよ。実家だと思ってさ。……待ってるから」」

兄のその言葉を思い出したのは、たぶんずっと願っていたからだ。期待しすぎてはいけないと念じながらも、どこかで信じたかった。無性に兄に会いたかった。この混沌を地球上の誰とも共有できなくとも、兄にだけは知ってほしい気がした。

地下鉄からホームに吐き出される。人の波が移動する。私は決意した。

「ごめん、村林君。みんなには遅れるって伝えて」

そう言い残すと、向かっていた出口とは別方向に走り始めた。

「え、ちょっと、三崎さん！？」

後ろから村林の叫び声が聞こえる。振り返らなかった。都営三田線のホームを目指す。千代田線から乗り換える。私は走った。

息を切らしながら、坂の上の家に辿りついた。最寄りのバス停を降りてからほとんど小走りになってしまった。タオルハンカチで首筋の汗をぬぐう。今日一日でこのシャツはどれだけの塩分を吸収したことだろう。

2か月ぶりの帰宅だったが、危惧していたような違和感はなかっ

た。角を曲がったところに、白い家はふわりと建っていた。自然な動作で玄関ポーチの扉を開けた。頭より身体が先に憶えている。ポーチライトの灯りに包まれる。むしろ、スーパーに夕食の買い物に出かけ、戻ってきたくらいの感覚だった。

ただし問題は、自分は今鍵を持っていないということだ。3月に家を出るときに置いてきてしまった。

地下鉄からバスに乗り換えるときと、バスを降りた後に1回ずつ、兄の携帯に電話した。両方とも留守電だった。メールもしようと思ったけど、なんて打っていいのかわからなくてやめた。「これから家に行っていい？」と訊くのも変な気がしたし、かといって「これから家に帰ります」というのも違う気がする。結局2度目の留守電に、これを聞いたら折り返しくださいとだけ残しておいたけど、コールバックはかかってきていない。

外から見る限り、家に電気はついていなかった。念のためインターホンを鳴らす。やっぱり反応がない。兄はまだ帰っていないようだ。

急に脱力した。ずっと急いでいた気持ちが、にわかに収束していく。

金曜日の夜なのだから、飲み会にでも行っているだろう。まだ20時前なので、仕事すら終わっていないかもしれない。もしかしたら、朝まで帰って来ないなんて事態も充分考えられた。

風船がしぼむようにポーチに座りこんだ。鞄を脇に置き、膝を抱える。深くため息をついた。

鍵がなくて家に入れないなんて、子どもみたいだ。

携帯電話には何人かの同期からメールが届いていた。「大丈夫！？　無理しないでね」とか「こっちのことは気にしないで」といった内容が、絵文字とともに夜に浮かび上がる。村林が体調不良とでも伝えたのかもしれない。彼女たちには、いきなり飲み会をすっぽかす理由なんて他に見当たらないだろう。そう思ってもらったほうが助かる。最後の最後にやってしまったな。私は苦笑して、携帯の

画面を閉じた。
　そのうち、スーツで体操座りしている自分が滑稽で、少し笑えてきた。5月でよかったなと思った。冬だったら悲惨すぎる。
　近所の家から、うっすらと談笑する声が聞こえてきた。一緒に美味しそうな匂いも漂ってきて、私は顔を腕と脚のあいだにうずめた。そういえば昼にお茶して以来、何も飲み食いしていないのだ。お腹の奥が匂いに反応したけど、今更どこか近所で食事を済ませる気にもならなくて、私は身体を丸めてただただ無力に座り続けた。

第7話

「しっかり者で、とても落ち着いていますが、子どもらしさに欠ける部分があります」
「なんでも平均点以上にこなしています。半面、積極的に興味のあることがないようです」
小学校の通信簿は、たいていそんなふうに書かれていた。
終業式のあとに教室で通信簿を受け取ると、定規で横線を引くようにまっすぐ文字列を追って、そっとランドセルにしまった。読み返したりはしなかった。読む前から大体のことは想像がついていたし、たとえ嬉しい内容じゃなかろうと、書きかえられるわけじゃない。ただ、自分は教師という職業とは相性がよくないのだろうな、というのはわかった。
子どもらしさに欠けるから、興味のあることがないから、それがなんだというのだろう。時間にルーズだとか忘れ物が多いとか、短所らしい短所なら直すこともできる。私はつとめて真面目にやっているだけなのに、なぜ自分ではどうしようもないことをわざわざ指摘されなければいけないのだろう。誰にも迷惑をかけず、問題を起こさず、生きているだけだ。
母が生きていた頃は、通信簿を見せるのが苦痛だった。母のため息を増やすかと思うと気が重かった。ただでさえ、私の存在は母を圧迫しているというのに。終業式の日はいつも時間と気持ちを持て余しながら、川沿いの道を歩くのがきまりだった。昼前に学校が終わったって、家には誰もいない。結局、小学校高学年になるまで、夕方まで時間をつぶす上手い方法をみつけられないまま、昼食も摂らずにあてもなく歩いた。ただし、川を渡ることはなかった。学校から、子どもだけで川向こうに行くなと言われていたのを守っていたというのもあるけど、それだけではなかった。川は幅が広く、水量が多く、少し淀んでいて、どちらかというとお堀のような感じが

した。
　ときどきひとり、小石を川に投げて遊んだ。川面にぶつかる瞬間の音を聞こうと思って耳を済ませるのに、毎回車や工事の騒音でかき消された。私は自分が小石になって、川に落ちる場面を想像した。たぶん、やっぱり誰にも気づいてもらえないのだろうなと思った。別に悲しくはなかった。ランドセルごと川に沈んでいく空想は、むしろ小気味のいいものだった。膝をかかえて、小さくなって、誰にも気づかれないまま、ひっそりと川の底に沈んでいく私。川の底は静かで、薄暗く、自由だろうと思った。
　そして、誰も私に干渉しない。

「紫野ちゃん……紫野ちゃん？」
　聞き覚えのある声がして、舟が引き上げられるように目が覚めた。知らないうちに眠っていたのだ。
　反射的に頭を上げると、目の前に私を覗き込んでいる顔があった。夜の色のなかでも、困ったような笑っているような独特の表情はすぐに判別がつく。2か月ぶりのその顔、その声。
「ああ、起きた。紫野ちゃん、大丈夫？」
　兄は心底驚いたという顔で、しゃがんだ状態のまま、私をじっとみつめた。考えるよりはやく、私の喉が応対する。
「ごめんなさい、待ってるうちに寝てたみたいで」
　自分の予想より、声はしっかりと出ていた。兄がくだけた安堵の笑みを浮かべる。
「帰ってきたら、玄関に人影があってびっくりしたのに、それが紫野ちゃんだったからさらにびっくりしたよ。一体どうしたの？」
「ごめんなさい。驚かせるつもりはなくて……」
　慌てて立ち上がったせいで、ふらりと足元が揺れた。兄がとっさに私の腕を掴む。一瞬にして、2か月前の夜の出来事が思い出された。春の晩、私はこの玄関ポーチで、兄にずっと嘘をついていたことを告白し、別れを告げたのだ。なんだかいきなり恥ずかしくなっ

て睫毛を伏せた。私はいったい何をやっているのだろう。
「本当に大丈夫？」
兄は私の戸惑いに気づいていないのか、子どものような目で覗き込んでくる。
「帰るって連絡しようと思って、何度か電話したんですけど……」
「わ、ごめんごめん。僕、今日ケータイ家に忘れて出ちゃって、会社の人にも怒られたんだよ」
それが実に兄らしい回答で、私は思わず噴き出してしまった。笑った私を見て、兄もはにかむように微笑んだ。３０歳にしては幼すぎる笑顔だと思うけど、ずるいところがないのが、この隆之介という兄なのだ。
「とりあえず、中に入ろう？」
鍵ががちゃりと回ってドアが開くと同時に、慣れ親しんだ匂いが家から広がった。この家だけの匂いが、私の中に満ちる。物言わぬ許容を勝手に感じて、私の心は自然と生気を取り戻していく。
「汚くてごめん。２週間くらい仕事がバタバタしてて……」
リビングには新聞やクリーニング済みのシャツが乱雑に放置されていて、確かに片付いているとは言い難かった。私が住んでいた頃は、極力物をしまうようにしていたから、一気に男の独り暮らしっぽい雰囲気が出た感がある。ただ、食べ物のゴミや空のペットボトルは一応まとめてあるようで、そこが兄らしいなと思った。
「そんなに汚くないですよ」
キッチンに立った兄が、電気ケトルに水を入れる。手伝おうとすると、手振りで断られた。
「紫野ちゃんがいた頃に比べたら全然……。まあ、座って」
促され、ソファの端にちょこんと座ってみる。壁時計を見ると２０時半過ぎだった。ずいぶん眠ってしまった気がしたけど、実際は３０分くらいだったようだ。
「食事は？」
そう尋ねると、彼は申し訳なさそうな顔をした。

「ごめん、食べてきちゃった。せっかくなら紫野ちゃんと待ち合わせればよかったね」
私は首を振る。
「飲み会とかはないんですか？」
「一応、誘われてたんだけど……。このところまともな食生活してなかったから、飲む気分じゃないなと思って、大戸屋のサバ定食食べて帰ってきちゃった」
兄がマグカップをふたつ持って、ソファへとやって来た。スーツの上着とネクタイを脱いだ下には、薄くドットが入った水色のシャツを着ていた。ちょうど、お腹の部分に私の視線が合う。数秒間凝視して、私は口を開いた。
「お兄さんさあ、ちょっと太ったよね？」
「ええっ！？」
兄が極端なくらい悲痛な声を上げた。
「特にお腹のあたり、やわらかいフォルムになりましたよね。昔はもっと少年体型だったと思うけど……」
「気にしないフリしてたけど、やっぱりそうかな～」
ローテーブルにマグカップを置いて、兄が悶絶した。その姿を見て、唇の端が薄く上がってしまう。ああ、この感じ。兄に対して遠慮する部分があるのと同時に、いつも少し意地悪したくなってしまう。兄が素直に反応してくれるのが、楽しくて仕方ないのだ。
「運動してます？　以前はたまにテニス行ってましたよね」
「最近さっぱり行ってないね。三十路越えると、急にいろいろ面倒くさくなって……」
兄が淹れてくれたコーヒーを飲みながら、私はますます生気を取り戻していた。インスタントのブラック。兄は自分のカップには牛乳を入れていた。何も言わなくてもわかってくれている。
「そりゃ、紫野ちゃんは若いし細いけどさ」
兄がついに不服そうな声を出した。私はマグカップを両手で支えながら笑う。

「責めてるわけじゃないですよ。ただ、こうして見ると、お兄さんも普通のサラリーマンなんだなって。というか、仮にも独身の御曹司が、金曜の夜にサバ定食なんて、ちょっと色気なさすぎじゃないですか？」

３０歳で、独身で、大企業のおぼっちゃまで、それどころか顔も性格も悪くない。本来ならこの時間、義理の妹とまったりコーヒーなんて飲んでいる場合じゃないはずだろうに。

しかし兄は気を悪くするでもなく、てらうでもなく、平然と言ってのけた。

「でも、おかげで紫野ちゃんに会えたから」

美味しそうにコーヒーを飲み干すと、静かにカップを置いて、兄は尋ねた。

「で、今夜はいきなりどうしたの？」

今度は、私がギクリとする番だった。

第8話

「特に、理由はないんだけど……」
兄に真正面から見据えられて、私は再び落ち着かなくなった。言葉を宙に浮かせながら、うまい言い方をなんとか見つけ出そうとする。
「研修中に、ちょっと思うところがあったというか」
我ながらまったく要領を得ないと思った。苦し紛れで言葉のあいまにコーヒーを飲んでも、いきなり生ぬるく感じられる。
思えば、確かに、どうして私はここに来たのだろう。
千代田線が日比谷駅のホームにすべり込む瞬間に、どうしようもなく兄に会いたくなったのだ。それ以外に表現のしようがなかった。
新人研修でたまたま昔住んでいた家に行き、中国人母娘からの集金に失敗した。今日の行動をまとめてしまえば、それだけのことにすぎなかった。だが、それと、今私がこの家にいることがどう繋がるのか兄には理解できないだろうし、私にだってわからない。
もし一から説明するとして、どこまでさかのぼればいい？　電力会社の新人研修をひととおり説明してから、今日の出来事を順を追って話せばいいのか。でも、村林まで登場させる必要があるとは思えない。必要としているのは、もっと、もっとシンプルな……。
私はゆっくりと顔を上げた。黙ったまま、空になったマグカップの底を見つめているのに自分が耐えきれなくなったのだ。
訴えるように一度まばたきすると、兄が私を覗き込んだ。
「うん？」
兄は不思議そうに、でもどこか楽しんでいるように、小首を傾げた。
それは腕のいい老給仕が、音を立てずに椅子を引いてくれるのに似ていた。
さあどうぞ、ここがあなたの席ですよ、と。

「お兄さんは、お姉ちゃんに会ったら、なんて言う……？」
言ってから、自分が驚いた。
そんなことを訊くつもりはまったくなかったのに。リビングがしんと静まり返る。兄は軽く目を見開いて私を見つめてから、顎に指をかけて思案のポーズを取った。
私はいったい何を言ったのだろう。既に後悔していた。兄にそんな質問をぶつけるのは失礼だった。姉は別の男と子どもを作り、結婚直前に兄を捨てたのだ。事情を知っていて話さなかった私は、充分共犯者だった。私に訊く権利はない。
だけど同時に、兄がなんと答えるのか、たまらなく知りたかった。なんて答えてもらえれば、私は満足する？　兄は怒るべき？　それとも姉を許してほしい？　むしろ何も言わないでほしい？　なんて答えなら、私は息をつける？
兄はそのまましばらく考えていた。高鳴った心臓の音が、自分の身体からはみ出しそうだった。５０メートル走の直後みたいに、喉の奥が干上がり、握った拳の内側に汗が溜まった。
「そうだねぇ……」
思わず身を固くする。
「子どもを、抱っこさせてもらう？」

数秒間、反応できずにぽかんとしていた。口をだらしなく開いたまま、まじまじと兄を見つめた。
「そんな、きょとんとしないでよ」
私は心底驚いていた。そんな私と間逆に、兄はいたってけろりとしている。
「なんで……」
「いや、だってもしかしたら僕の子どもの可能性もなくはないわけだし……。って、まあ９９．９％ないと思うけど」
兄が自分で自分にツッコんでいる。
「遼子の子どもなら、きっといい子だろうねえ。今さら何を話せば

いいのかは正直わからないけど、子どもを見れば、僕の知らない時期の遼子が、なんとなくわかるんじゃないかな？って気がする」
それに、と兄は付けくわえた。
「単純にいたわってあげたいと思う。どういう経緯であれ、子どもを産み育ててきた女の人のことは。それって、すごく偉大なことだよ」
私は再度、まじまじと兄を見た。信じがたい男の顔を見た。呆気にとられている端で、こみ上がってくるものを感じる。
「なんていうか、ほんと、お兄さんは……」
何か眩しいものが、身体から湧きあがっている。
「そもそも、『なんて言う？』って質問の答えになってないじゃないですか……」
気づけば、私は声を出して笑っていた。くつくつと横隔膜が振動するのが止まらなかった。「えー」とか「だってさ」とかいう兄の声を聞きながら、ソファに背を沈めて天井を仰ぐ。
私は私の薄暗い穴が、たっぷりの液体で満たされるのを感じる。そこからシャンパンの泡のように、金色の細かい気泡が切れ目なく立ち上がっている。あらゆる管を通って、四肢の隅々まで行きわたる。指先や、脳や、瞼の裏で、ぱちぱちと軽やかに弾けて、ほろ酔いのような心地になる。
そして私は思い知るのだ。
自分が思っていた以上に、はるかにずっと、私は愛してしまっているのかもしれない。
この家を。この空間を。この時間を。この兄という存在を。
きっと愛してしまっている。

泊まっていけばいいのに、という兄の誘いは丁重に断った。22時前。まだ飲み会は続いているだろう。ずいぶん遅れてしまったけど、今からでも行こうと思ったのだ。そう伝えると、兄は「同期は大事にしたほうがいいからねぇ」と言って引きとめなかった。

「来週、配属が発表になるんですけど」
玄関先で見送られながら、私は振り返って言った。
「改めて報告するので、そしたら飲みに行きましょうね」
今度は家の近くではなくて、社会人らしく、互いの会社の中間地点がいいなと思う。
「お店考えとくよ。でも今夜はとりあえず、同期と楽しんでおいで」
兄が目を細めて頷いた。少年のようなのに、保護者みたいな顔も似合う。改めて不思議な人だと思う。
「あとね、お兄さん」
「ん？」
私は鞄を肩にかけ直すと、玄関からスリッパをはいた兄を見上げた。
「同期に、お兄さんのこと、話してもいい？」
兄は一瞬不思議そうにしつつも、口角を上げて応えた。
「もちろん」
私の唇の端もきゅっと上がる。そのまま軽く手を振って、夜の空の下に出た。後ろで玄関のドアが閉まる音を聞きながら、私は道を歩きだす。
携帯電話を開くと、さらに何通かのメールと、いくつか着信が残っていた。その中には村林からのものもあった。村林のメールには、「みんな待ってるから、遅くなっても気にせず来なよ！　ラスボスは最後に来るもんだしね。今夜はオールだっ！！」と書かれていた。不覚にも、ラスボスってなんだよ、と思わず独り笑いしてしまった。ちょうど停留所にバスが来ていて、乗り込んでメールの返事を打つ。バスが駅へと走り始める。

私は心の中で姉を呼ぶ。お姉ちゃん、お姉ちゃん。
姉抜きの人生を、どこかで受け止めきれずにいた。いつまで経っても仮住まいのようで落ち着かなかった。姉も兄も関係ないところまで走り抜けたいとも思った。加害者意識と被害者意識が絡み合っ

て、自分でも何を求めているのかわからなかった。
古いアパートの光景が甦る。変わっていなかった町が見える。
捨てられたのだ、と思っていた。でも、私を捨てたのは私だったのかもしれない。
繋がって続いていくものを信じていなかった。脱ぎ捨てるように、細切れに生きていこうとして、かたくなに拒み続けていた。
でも、お姉ちゃん。
あなたの婚約者は大した人だった。ずっと疑っていてごめんなさい。きっと、結婚していれば世界一いい夫になったろうに。それだけが残念だけど、仕方ない。分岐した人生を無理やり戻すことはできない。いくつもの電車を乗り換えながら進んでいくしかない。
姉に再び会えるとき、どんな言葉が出てくるのか、私にはわからない。ただ、幸せであってほしいと思う。今は無理でも、この先どこかで会えればいいなと思う。
ぐるりと巡り巡って、いつか最後に帰せる場所で。

エピローグ

配属先は横浜支社の営業部になった。
特筆すべきエリアや職種というわけではないが、文句をつけたり不安になるようなものでもなく、要するにかなり妥当な人事だと思う。私は頭の中でヨコハマ、と繰り返して、そっと吐息をついた。緊張が解けたというより、一仕事終えたあとの小休止みたいな意味で。もちろん、本当の意味で仕事が始まるのはこれからなのだけど。
人事が発表されたばかりの多目的ホールは、誰もかれもが頬を上気させて情報交換し合っている。
「三崎さん、横浜支社だよね？　私も！」
先週、一緒にカフェに行った女の子のひとりが声をかけてきた。
「知ってる子が一緒でよかったぁー！　三崎さん、仲良くしようね」
背の低い彼女は、興奮と安堵が入り混じった表情を浮かべて私を見上げた。
「うん。こちらこそよろしくね」
私は頷く。偽りではなく、素直にそう思った。
「女の子は割と近場が多いみたい。杏奈は品川で、真由子は川越だって」
こちらが聞くまでもなく、みんなの配属先を指を数えながら教えてくれる。
「男子も特にサプライズなのはいなくて……。あ、ひとりいた」
彼女の視線が窓際の、ひときわ騒がしい集団に向けられた。私も目で追う。
「なんで、銚子なんだよーーーー！！！」
4～5人が取り囲むなか、村林が頭を抱えて飛び跳ねていた。相変わらずオーバーな男だが、言葉ほどショックを受けてるようには見えない。
「しかも、支社じゃなくて営業所なんだぜ！？」

誰かが「ヤッシー、調子いいからぴったりじゃん」とギャグを飛ばした。遠巻きから見ている私たちに村林が気づき、大声をあげた。
「三崎さんは横浜なんでしょ！？」
訴えるような目で見てくる。
「一緒に研修したのにズルいよ～。三崎さんも一緒に銚子行こうよ～！」
「これを機に、“取り立て屋”道を極めるのもいいんじゃない？」
私は微笑んでみせた。村林が恨みがましそうな表情で、「三崎さんの意地悪……」と力なくつぶやいた。
でも実は、嫌味だけで言ったわけではない。週明けに研修レポートを提出する際、村林のレポートを回収するついでに見た。私が紋切り型の文章で無難にまとめていたのに対し、奴のレポートには筆圧の高い、子どもみたいに乱雑な太い文字で、“身寄りのない老年のお客様を、集金を通じて定期的に生活のサポートしていくことも、これからの電力会社が取り組む課題なのではないかと思った。”と書かれていた。
正直驚いた。
ＫＹで調子のいい男ではあるけど、それだけではないのだろう、と思う。相性が合うかどうかはまた、別の問題としても。
「三崎さん、三崎さん」
肩を叩かれて振り返ると、数人の女の子たちが手招きしていた。近づくと、真由子という子が内緒話するように私に耳打ちした。
「ヤッシーさ、ほんとは三崎さんと離れちゃうのがイヤなんだよ」
「ええ？」
苦笑して訊き返したら、女の子たちは堰を切ったように語り始めた。
「飲み会のとき、三崎さんのことすっごい気にしてたんだから！」
「ヤッシー、『男と会ってるんじゃないか』ってソワソワしてたよ～」
思わず噴き出しそうになるのを必死でこらえたが、それが肯定の

表情に見えたのか、彼女たちはさらに前のめりになる。
「三崎さんはヤッシーのことどう思ってるの？」
横目で村林の姿を確認した。引き続きバカをやっていた。有り得ない。
言葉を探していると、場が期待に包まれるのがわかった。それが面白くて、わざとじらすように困った顔をしたら、女の子たちが目を輝かせて、ぐい、と一歩近づいた。
なんて無邪気なのだろう、と脱力する。だが、端から醒めていくような感覚とは違った。むしろ平和だなあと、感心してしまう気持ち。
村林の顔を思い浮かべた。目と目が離れたタレ目、浅黒い肌、パクパクとよく動く口……。
「綺麗なナマズ、かな」
私を取り囲む女の子たちが、皆きょとんとした。そして、爆笑した。
「その例え最高―！」
「超ウケる！　三崎さん何気にめっちゃ面白いんですけど！」
スーツの身体を折って、女の子たちは笑った。沼から顔を出す村林の姿が目に浮かんで、自分でも笑いがもれてしまう。私たちの姿に、遠くから村林を含む男子たちが怪訝な顔をしているのが見えた。
「そうだよね。三崎さんがヤッシーを相手にするわけないよね」
それ以上私が何も言わなくても、女の子たちは勝手に納得し合っていた。私は最後にもうひとつ、にやりと笑ってダメ押しをした。
「実際、男と会ってたの」
キャー！！　という嬌声がいっせいに噴出した。誰誰？　彼氏！？　と悲鳴に似た叫び声が渦をつくる。村林が近寄ってきた。
「なんの話してんの？　俺も混ぜて」
「ヤッシーには教えないよ～！」
女の子たちが声を揃えて叫んだ。ハモり具合がおかしくて、みんなで顔を見合わせて笑った。村林が首をかしげた。

改めて平和だなぁとホール内を眺めると、陽射しの強さにくらりとした。そのとき不意に、今日みたいな日は二度と訪れないのだと悟った。

これから配属先に散り散りになり、目の前の仕事をこなしながら、私たちはそれぞれ生きていく。こんなふうに集まることはもうない。もしかしたらこの先喋ることすらない同期もいるかもしれない。

電車が同時に何本もすれ違うような轟音が聞こえた気がした。でもそれは一瞬のことで、すぐに目の前の風景に戻る。私は誰にも気づかれないくらい、小さく頷いた。

多目的ホールは、梅雨入り前の眩しい陽気で溢れていた。似たような境遇の、似たような格好の若い男女たちがさざめき合いながら、出発を待っている。私もそこにいる。

完

エピローグ（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。以下、冗長なあと書きです。

本作は、『さよならお兄ちゃん』の終盤を書いている頃に思いつきました。『さよならお兄ちゃん』は、３人称とはいえ割と隆之介側の視点で書いていたので、紫野の目線で彼女の内側をじっくり書いてみたいなというのがきっかけです。
が、いざ書き始めたら、あまりにもビター＆ハードボイルドな女で、我がキャラクターながら息苦しくなることも・・・
その息苦しさが少しでも文章に表れればいいなと思いながら書きました。最終的に、ちょっとですが紫野を解放してあげられて良かったです。

また、前作ではあえて地名をぼかすような書き方をしていたのですが、今回は地名や路線名をばんばん出したのも新しい試みでした。そのぶんハードルも上がりましたが、取材と称して普段乗らない路線に乗ったりして、楽しかったです。
ちなみに紫野が昔住んでいた町に流れているのは、荒川です。はっきりとは書きませんでしたが京成押上線沿線をイメージしていました。隆之介の家は、春日～白山あたりの高台のつもりでしたが、今は白金台もアリだなーと思っています。

『キセル』というタイトルでしたが、副題というか英題は『Ｔｈｅ　Ｇｉｒｌ　Ｉ　Ｌｅｆｔ　Ｂｅｈｉｎｄ』でした。後者のほうがテーマ自体は伝わりやすいですね。
（どうでもいいですが、一応『キセル』以外の作品にも英題があったりします。『さよならお兄ちゃん』は『Ａｌｍｏｓｔ　Ｓｉｓｔ

ｅｒ』、『眼鏡の騎士』は『ｔｈｅ　Ｋｎｉｇｈｔ　ａｎｄ　ｔｈｅ　Ｂｒｉｄｅ』、『証明写真』は『Ｓｐｅｅｄ　Ｐｈｏｔｏ』・・・ではなく、『３　Ｍｉｎｕｔｅｓ　ｆｏｒ　Ｌｏｖｅｒｓ』です（笑））

今回、テーマソングは書く前から決まってました。
まずはサティの「グノシエンヌ」。幻想的で、どこかに迷い込んでしまう感じが、紫野が町をさまようときにぴったりだなと思ってました。
もう１曲はＣｈａｒｌｏｔｔｅ　Ｍａｒｔｉｎの「Ｒｅｄｅｅｍｅｄ」。反復するピアノがとても美しい曲で、内なる旅を続けながら最後に救われるイメージが作品のテーマそのものでした。Ｃｈａｒｌｏｔｔｅ　Ｍａｒｔｉｎはそれこそ「Ｔｈｅ　Ｇｉｒｌ　Ｉ　Ｌｅｆｔ　Ｂｅｈｉｎｄ」という曲も歌っていたりして、今回かなり執筆時にお世話になりました。

それにしても、去年いきなり思い立って書き始めた紫野と隆之介の話が、ここまで続くとは思っていませんでした。読んでくださった皆様のおかげです。
自分でもこの物語に愛着が湧いてしまって、もしかしたらもう１作くらい続編を書くことになるかもしれません。先の話だとは思いますが、また是非お目にかかれれば幸いです。

ここまで長々とお付き合いくださり、ありがとうございました。
感想・評価等お待ちしております。本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0035q/

キセル

2011年3月6日20時25分発行